

# 新書紹介

## 日本産業の課題

——公害問題の考え方——

村田富二郎著

勁草書房 A5版 二四四頁 一六〇〇円

企業の第一線の化学技術者であった著者（横浜在住）によるオーソドックスな公害論である。公害の本質論ともいべき公害・技術・経済の関係を豊富な技術事例を駆使して分析し、公害問題や災害問題の「考え方」を明らかにする。技術的知識をもたないものにも理解できるように、また気軽に読めるように書かれているがけっして入門書ではない。このところ「公害と経済やエネルギー」問題について、技術の実体を捨象したうわついた論議が目立つなかで、本書は貴重な労作といえよう。

本書で一貫して追求されているのは、古くて新しい問題である「公害は防止可能」かどうかということ、「公害防止技術」の論理構造である。直観的には公害は防止可能だと思っても、専門的技術知識をもたないものにはなかなか言い切れない問題である。著者はまず第一章「公害は技術問題ではない」において、「公害は防止可能」と明快に答える。その際に著者が強調するのは、通常用いられている「公害」という言葉の内容を「環境汚染」、「公害現象」、「公害問題」の三種類に区分して考えることの必要性である。環境汚染は技術的必然でなくすることは不可能である。しかし、環境汚染がただちにわれ

われの生活を破壊するわけではない。「公害」の内容を生活破壊のレベルである公害現象の意味でとらえれば、公害現象を防止する技術は公害防止技術は「存在する」のであるから、公害は防止可能であると結論する。公害防止技術が存在するにもかかわらず公害現象がなくならないのは、「利益や便利の追求」が優先されているからである。この「公害現象が社会問題である」との認識が公害を解決し、人類の発展を約束する新しい出発点である、というのが著者の基本的な公害観である。なお公害問題はというと、環境汚染や公害現象とも違い「市民がその被害を意識して、自分の身を守る行動をおこすことに始まるのですから、技術の問題ではなく、人権意識に関する社会問題」であるという。

ところで、公害現象は社会問題と結論するだけでは何も解決しない。問題を前進させるためには、公害防止技術の存在を觀念的なものではなく、具体的現実的で適用可能なものとしなければならぬ。本書の特徴はまさにこの点にある。第二章以下の大半で、生産技術との対比において公害防止技術の特性や考え方が論じられる。

第二章「『無公害技術』をめぐって」では、化学工場の事例を中心に「無公害技術」の欺瞞性と既存の生産技術の適用によって公害防止が可能であることについて——

第三章「公害防止技術の特性」では、%を問題とする生産技術とppmの公害防止技術との発想の違いを明らかにするとともに、公害防止技術の分類と要件について——

第四章「公害対策における思考力の貧困」では、公害対策におけるネガティブアプローチの意義と演繹論理の重要性について——

第五章「欠陥だらけの安全対策」では、有害か無害か「不明なもの」の考え方と原発やLNG等の安全対策の欠陥について——

終章の第六章「現代社会の矛盾としての公害」では、全体の総括として「現在の経済秩序をこわさない範囲での規制」ということの本末転倒性について——

技術者の立場から多くの事例を用いて展開される。

若干の問題点を指摘するとすれば、電解工場からの水銀汚染等の個別的な産業公害とコンビナート公害や自動車公害等の集中集積あるいは技術の巨大化に伴う公害現象とを、著者は一括してとらえている。しかし根本は同じとしても、発生や解決策の論理は前者と後者では異なるのではなからうか。この点についてもう少し立ち入った分析が欲しかったと考える。

ともあれ、最近、だれが書いたかによって中味もほぼ推定できる公害論の多いなかで、内容のある新鮮な書物であった。

〈公害対策局公害研究所  
森 清和〉